

浄土

1977 - 7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (其別表陸地郵便) 第三号
昭和五十二年六月二十五日印刷 昭和五十二年七月一日發行
第四十三卷 第七号



無言の語らい

各地に梅雨明け宣言が出されるころ、わたしは「おぼん」を迎える。長雨による湿気を含んだ日中の暑さがやや薄れ、陽が西に沈むころ、鉦の音のするあちこちから、迎え火の煙が棚引いてくる。それぞれの思いを胸に、ご先祖さまとの再会だ。

昨年、お送りした折の約束を果し得なかった人は、うしろめたい気持でお迎えし、その逆の人は、晴れてお会いすることとなる。

昨今のような喧騒の社会にあっては、己れのペースをつかむのに精一杯で、他人どころではない。まして、遷った人を偲ぶ余裕すらないのが当前といえよう。しかし、この「おぼん」を迎えるころとなると、不思議と亡き人が恋しくなり、その人との無言の再会がなつかしくなってくる。

今年のわたしは、この感が一入強い。それは、幼少にして別れた父の二十七回忌を、さらに、今次大戦の激戦地の一つ、ニューギニアで戦死した叔父の三十三回忌を迎えたため

である。交通戦争の先鞭とでもいおうか、朝、元氣に出かけた父は、夕べには、輪禍で無言で帰宅した。父死亡の実感もなきまま、子ども心に興味半分のぞき見た、その死に



顔は、必死に何かを語りかけようとしていた。多分、人生半ばの不慮の死ゆえ、後事を託したい思いであったにちがいない。また、そう思わずにはいらなかった。

この無言の語りかけを続けて二十六年。ある年はその成長を喜び、ある年は若氣にはやる行為を戒めてくれた。しかし、自分に都合の悪い年は「死人に口なし」である。が、翌年の語らいまでには、そのうしろめたさを克服したい気持一杯で、その一年を過すことになる。これが、年々歳々続いている。

一方、叔父のことは、物心つく前の出征であつたので、記憶にはない。しかし、兄弟の中で一番聡明であつたことから、その死を悼み、生れ変りとばかりに溺愛してくれた祖母の心情を察すると、他人ごとではない。その心情に報いるためにも、人として表も裏もない理想像に、なき叔父の姿をだぶらせ、畏敬の念つる像を描き、それを目標としたのである。この理想像としての叔父の域には、未だ達しない。当然である。そこにわたしの目標とする人生があるからだ。

命の洗濯をする「おぼん」を迎え、理想像に近づくため、「無言」という糧を与えられた己れを、さらに一歩前進させ、世間の荒波に挑み、一年もまれてみようと思う。

|| 七 月 号 ||



一向専修には、こと
に三心を具すべき也
——『念仏大意』

目 次

法 話

白 い 道……………一 瀬 直 行 ……(2)

ともに生きゆくよろこびを
殊にハワイのおぼん行事を通して ……後 根 定 璽 ……(6)

<人生読本コーナー>泣いて笑って……………正 司 歌 江…………(19)

<ふるさと紀行>法然寺虫干会の頃……………細 井 俊 明…………(24)

いのちを考える④<先祖>

かかわりあいを大切にする心……………林 錦 洞 ……(12)

芸道を受けつぐ心……………藤 間 勘紫恵 ……(16)

<随想> 心のままに〔六〕……………川 内 知 光…………(30)

篤信岩船家のこと……………須 藤 隆 仙…………(32)

<読者の声>机上の銘石について憶う ……清 水 栄…………(28)

<表紙裏・巻頭言> 無言の語らい……………長 谷 川 宣 丈

念仏ひじり三国志③——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉…………(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



白 い 道

私は十七歳の時に父と死にわかれた。父は四十七歳の働き盛りで急逝した。

父はものごとに積極的な方で野心家であつたともいえる。東京へ出て来て、現在の寺をもった。思えば自分の力以上の理想に燃え、無理をおしていた当人として、まさか四十代の若さで死ぬとは思わなかつたであらう。寺をよくするために不相応な庫裡を新築し、手をひろげるだけひろげた。ところが、万事中途半端に終り、達成することなく終った。腎臓萎縮腎で生命をおとしている。

いちのせ なお ゆき
一 瀬 直 行

(作 家)

父の死によつて残されたものといえは莫大な借財であつた。そして母と私をかしらに五人の兄弟があとに残され、一家の生活が差し迫つていた。早速あとつぎの問題がおきた。まだ十七歳の私には住職名義をとる資格がなかつた。

早速住職名義をとらなければならなかつたが、私には自分のやりたい希望もあつた。けれど自分勝手な真似は、周囲の事情から許されなかつた。

私は父の生前中から文学の道に走り、詩を

書いていた。ところが、世間の風当たりは手痛い。寺の伴のくせに軟文学なんか熱中し、自分のおかれている立場を少しも考えていない、と非難された。

本来詩は途中で止めて止められるようなものとは違う。死ぬまで付いてまわる。私はなんといわれても書き続け、今日まで下手なりに作品を発表している。

何故寺の伴なんか生れたのかと、当時は嘆いていた。その頃は寺の子は親のあとをつぐことをあまり好まない。もともと寺の子だけには限らない。だいたい親のあとをつぐことを一般にいやがっている。ところが、最近事情が変って来た。ただ損得から計算している。それに寺の生活様式も変って来、これも職業と解しても不思議に思うものがいなくなった。

私は殊勝な宗教心があったわけではない。なにかの動機によって求道の道に入ったわけではない。父の急死によって莫大な借財を抱

え、一家の明日の生活を考えて、否応がなかった。

当時は、いわゆる大正年代の左翼はなやかな頃であった。文学の世界でも左翼的な作品が全盛をきわめていた。甚だしいのは、そうでない作品は文学ではないとまでいわれていた。そのためにこれまで曖昧な立場にあったもののまでが、進んで左翼へ走った。乗りおかれてまごまごしているものは日和見主義として軽蔑され、はては落伍者あつかいをうけていた。

一方、宗教は単純に阿片あつかいされた。そこに依存するものは目に見えない圧迫をうけ、日頃窮屈な生活を強いられていた。

相変らず私は下手な詩を書き続け、世の中がどう変わろうと自分一人の世界に閉じこもっていた。かるはずみな真似は出来ない。己れを裏切るようなことは出来ない。一方左翼陣からは寺の生活に対して厳しさが増していった。

毎日が息のつまるような思いでいた。そして暗くなれば家を抜け出し、浅草あたりの盛り場をのみ歩いていた。酒に酔っては内心鬱を晴らしていた。だが、そういつてはどこかで自分に嘘をついている。実際は浅草の魅力にとりつかれていたのではないか。浅草は心に陰りをもった人たちを救ってくれる。ともかくやけ糞な気持もあって酒に溺れ、生活は荒れていた。

父は生存中から寺の生活について厳しく教えていた。在家の生活とは違う。なにごともしなえ目にしなければならぬ。一例をあげれば昼間から魚を焼いてはいけぬ。庫裡に魚の匂いがこもっては檀家の手前よくない。檀家のいる前で赤ん坊を泣かしてはいけぬ。おむつなどは人の目につく所へ干してはいけぬ。その他あれもいけぬ、これもいけぬ、いと、いけない尽くめの生活であった。それならば平常は堅く守られているかといえ、実際にはその裏腹であった。そこには表もあ

れば裏もあるという二重の生活がいとなまっていた。人の目につかなければ、世間並にどんな生活にしてもよいのかという疑問がわいて来る。

その点今日とは事情が違う。それも世間からは同じ人間であるからには止むを得ないと見すごされている。そこに一層たえがたい苛立ちをおぼえた。いたずらに卑屈となり、自己卑下におちていった。

その頃書いた詩に、

白い道

最後のその時も

同じ嘘であると思い

嘘に嘘をかさねた

重厚な嘘であると思い

おれは装われた場面を蹴って

ひとり白い道をかえってゆく。

まだ若い頃の作品で、その間五十年近くの歳月が流れ去っている。

私は今日までいろいろな暗い出来ごとに遭遇して来た。それをいちいちのり越えて来たつもりでいたが、今日改めて作品を読み返してみると、あまり心境に進展も変化もないのに驚く。一人白い道をとぼとぼと歩いて来たにすぎない。

私は七十の年をすぎて年老いたことを感じ、肉体の老化をつくづくと感じる。幼少の頃は、至って病弱で医者薬をはなしたことがない。大病をわずらって命拾いをしたこともあった。それが今日までよくも長生き出来たものと思う。

これまで不自由をおぼえなかったのが、急に視力が衰え、歩行が意のままにならなくなった。七十の年をこせば当然といえば、当然かもしれない。人から話にはきいていたものの、こんなにもだらしなくなるとは思わなかった。

なにごとによらずこの頃は、はかなさ、空しさが付いてまわる。ものごとに関心が薄らいだともいえるが、別に自分が年老いたためとは思わない。若い頃の作品を読み返してみても、既にそこに現在の考えていたことを知る。同じはかなさ、空しさでも一段と掘りさげられ、一層澄んで、深められていくような気がする。決しておごった気持からいいうのではない。

七十年という長い歳月の間に決定的に植え付けられたことといえば、やはり大正十二年の関東の大地震と、昭和二十年三月九日の夜間空襲により下町一帯が焦土と化した時である。いずれもまる裸に焼け出され、危く一命を拾った。目にするものは、ことごとく焼き払われ、焦土と化していた。つい昨夜まで親しく語り合っていた相手が、一夜あければ惨たらしい屍をさらしていた。あるものはほろび、土に化することをその時程身にしみて感じたことはない。



ともに生きゆくよろこびを

△殊にハワイのおぼん行事を通して▽

あとねじようじ
後根定璽

(ハワイ浄土宗別院駐在)

昨年の夏、ここホノルル市内にあるハワイ浄土宗別院において、「開教使研修会」「開教助員講習会」が開催され、講師として日本より真野龍海大正大学教授、佐藤治子浄土宗寺院婦人会会長が来院された。

研修会終了後、佐藤夫人はアメリカ本土での会議に出席され、一カ月後、帰途再びハワイに立ち寄られた。ちょうどその日は、別院のお盆行事が終了した翌日で、別院の本館（本堂）前の広い芝生の庭には、ハワイ特有の強い日差しに照らされて、お盆の大塔婆供養のために建てられた、約五百本ほどの塔婆が、まだ組まれたままになっていた。塔婆といっても、一本が三、五メートル以上もある大きなものである。その一本一本には、阿弥陀如

来より直接お導きがあるようにと、本尊さまのみ手よりのばされた白いさらしが巻かれている。この別院の広い庭いっぱい建てられた大塔婆群は壮観なものである。

佐藤夫人は、しばらくこの光景を見ておられた。そして私に「ハワイで、このように盛大なお盆の行事が行われていることを日本の方は、おそらくご存知ないと思いますので、一度紹介しては……」と、『浄土』誌への寄稿を話された。そこで、以下ホノルル別院を中心としたハワイのお盆行事を、皆さまにご紹介したいと思う。

現在ハワイでは、オアフ島ホノルル市内にある別院を中心に、各島に十七の浄土宗寺院があり、間宮敏雄総長のもと、各開教使が教化に専念している。また浄土宗の

ほかにも、真宗・曹洞・真言・天台など、各宗の別院がそれぞれ教化につとめている。

私は三年前の秋、ハワイ開教区に赴任したが、最初は当地の事情をよく理解できず、とまどいと驚きの連続であった。それは、言語や生活様式の違いはもちろん、開教使としての務めと、それを取りまく環境が日本と大部異っていたからである。朝六時の晨朝礼拝に始まり、各種法務はもとより、病院慰問・新聞作成(『布哇仏教』など日米両語による布教誌)・ラジオ放送・事務整理とつづく別院の一日は、自坊で月詣りや法要を主としてきた私にとって、驚きであった。この頃になって、「太平洋の人種のルツボ」と呼ばれているハワイで生活をして、多少ながら異国の風俗や習慣、文化や宗教の相違などを学ぶことができたと思えるようになっていく。

さて、ハワイにおける仏教行事は、日本のそれと大体同じである。ただ四月の「花まつり」と、七、八月の「お盆」が、各種行事のなかでも、特に盛大なことが日本と多少異っている。そして、このような大きな仏教行事は、ハワイ仏教徒連盟(Hawaii Buddhist Council)が主催となり、各宗派合同で行われている。

殊に「花まつり」については、ハワイ州に限り「仏陀の日」として、十数年前に州議会の決議で制定され、毎年四月、ハワイ州知事より釈迦の降誕を祝う行事としての「花まつり週間」(Buddha Day Celebration)が宣言される。このことは、仏教国である日本ではなく、キリスト教の国といわれるアメリカでのことだけに、大変意義深いものを感じるのである。同時に、仏教の研究においても、ハワイ州立大学の東洋文化研究は、全米の他の大学を一步リードしており、宗教、特に仏教についての鋭い研究が、宗教学者を中心に進められている。

ハワイのお盆

さて、こうした中でハワイの仏教徒がいちばん大切に、かつ盛大に行なってきた行事が、次に紹介するお盆の行事である。

毎年六月の終りになると、真赤な太陽が水平線の果てに沈み、街々に夕闇のとぼりが深くなる頃、どこからともなく「ドンドコドン……」と鳴る太鼓の音が聞えてくる。七月から始まる「盆踊り」を告げる太鼓の音だ。ハワイの盆踊りは「ボン・ダンス」(Bon Dance)と呼ばれ、現在では七月から八月にかけて、ハワイの夏の夜を飾る風物詩として、一般の人々に親しまれている。

その頃になると、各仏教寺院の庭には、日本の盆踊りと同じように紅白の幕を垂した矢倉が組まれ、その回りには幾百もの照明用の提灯が下げられる。そして、その明りのもとでは、太鼓の音にひかれて集った人々が、時を忘れ、われを忘れてにこやかに踊りだす。踊りの輪の中には、一世のお年寄りから、まだ母親に抱かれていてもおかしくない四世、五世の子どもたちまでも、一人前に浴衣を着せてもらい、見よう見まねで手をあげ、足を動かして踊っている。これには日系人だけでなく、白人やその他各国の人種の人たちも参加する。これらの老若男女、人種をこえた人々が、各々浴衣やパンツ、ムウムウなど、色あざやかに思い思いの衣装を着、太鼓に合わせ、楽しげに踊っている光景は、ハワイならではの夏のほほえましいひとときといえましょう。

お盆の最後には、こちらでも「灯籠流し」が別院をはじめ、いくつかの浄土院で行われている。豊かな自然の中でのそれは一層印象深いものがある。世界的権威をもつ国際地理誌『ナショナル・ジオグラフィック (National Geographic)』や、ハワイ大学で刊行された『ハワイの王国 (Things Japanese In Hawaii)』にも、この灯

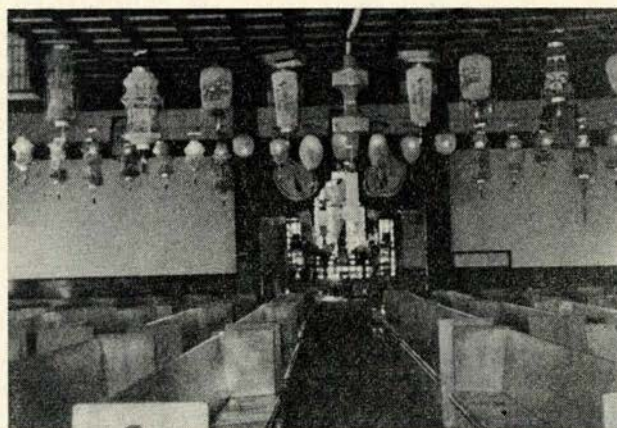
籠流しについての記事が詳細に載せられている。因みに、ハワイ大学アジア太平洋言語学部前部長デ・フランシス博士は、その著『ハワイの王国』の中で、オアフ島北海岸にある、ハレイワ浄土院の灯籠流しについて、

親船が海原に浮ぶと開教使の説経と同時に、五色の灯籠に火がともされる。海岸から十尺ほど離れた海面を流れ進む親船の後に、次から次へと灯籠が続き、岸辺を離れた灯籠は、スイスイと一直線に沖の方へ向って行く。あたかも生きている人が互に語りあっているように見え、数個の灯籠が組々になったかと思うと、突然大波に打たれ皮肉にも離れ離れになつては、また一緒になる。中には行列から離れ淋しそうに流れ行くものもある。星のように遠く見える灯籠の火が波に巻き込まれ、急に消えたかと思うと、また現われる。月の光に照らされて遠くに浮ぶ不夜城のように見える素晴らしい光景は、この世に在るのかと思われるほど素敵な眺めである。灯籠は、オアフ島の北端にあるカエナ岬に向い、西へ西へと向って大海原を越え、やがて西方浄土へとつく……。 (一九七四年七月『布哇仏教』より)

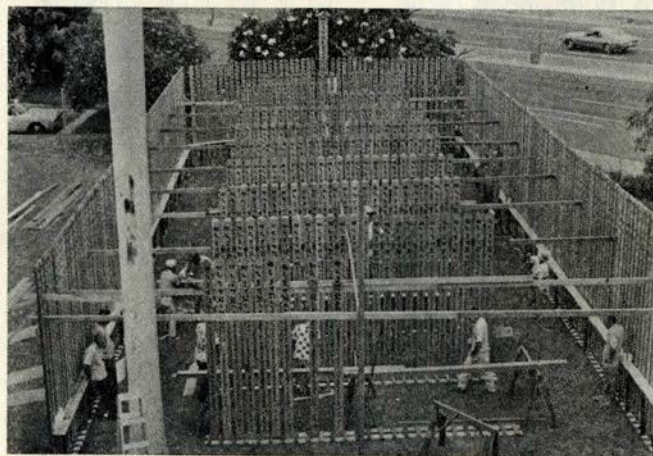
と、海原を流れ行く灯籠の火を見つめ、仔細にその情景

を述べていられる。

このハレイワ浄土院の灯籠流しには、ホノルルをはじめ各地から多数の人々が参加し、灯籠を流す夜の海辺には、何千いや万に近いと思われる人々が、波間に見えかくれて流れ去っていく灯籠の火を、遠く



(本堂内の飾りつけ)



(大塔婆供養の様子)

闇の中に消え去るまで、ただじっと静かに見送っている。それは来年のお盆までお別れをする祖先の諸霊に、名残りを惜しむようでもあり、また現在生きている私たちと祖先とのつながりを、再確認しているようでもある。

浄土宗別院の
「お盆施餓鬼」
の法要は、毎

年七月中旬の四日間、オフア島全開教使参列のもとで、昼夜二回、計八回の法要が厳修され、最後の夜の「精霊送り」と続く。

法要に際しては、数日前よりの婦人会や青年会、日曜学校の生徒たちによる清掃奉仕によって、別院はすっかりはき清め、みがかれる。西洋式に造られた二階の本堂は、長椅子が向い合わせに並べられ、天井からたくさんの提灯

が吊り下げられている。そして、当日朝早くから花や果物を抱えた参詣者が絶えない。笹で囲った施餓鬼壇には、参詣者が持ち寄ったパイヤ、マンガ、パイナップルなどの果物や、アントリウム、極楽鳥、ランなど色あざやかな供花によって、南国らしい雰囲気となる。

別院の盆法要に際しては、十数人の僧侶による厳肅な法要もさることながら、その参詣者の多いことが注目される。日頃はお寺に顔を見せない子どもたちも、お盆は先祖さまにお参りするもの、と思っているのでしょうか、ともかく本堂内の五百人分の椅子に坐りきれず、階下の事務室にまで人が立ち並んでいる有様である。

この別院でのお盆行事で、一際目立つものは大塔婆の建立である。本館前の庭には、三界万霊の供養塔を中心にして、ちょうど本尊さまと向い合わせに、前述のような塔婆が建てられる。その光景はあたかも塔婆の家が建ったかのように見える。別院に赴任し、初めてこの偉容な大塔婆群を見上げた時、日本ではこれほどの規模の塔婆供養を経験していなかったのだ、これが本当に異國の地の施餓鬼供養か、と自分を疑ったほどであった。そして、「先生、こんなに立派なもん、日本でも建て

のかね？」と青年会員に尋ねられたことばはいまも忘れることができない。

この大塔婆建立の準備は、檀信徒の年忌、戒名調査、配置図作成、塔婆の削り直し、そして最後の組み立てまで、少なくとも四カ月の期間を必要とするため、その準備は、四月の花まつりと同時に始められる。したがって、この期間が別院では、一年中で一番忙しい時期である。総長はじめ各開教使は、早朝から夜ふけまで精を出して働く。なかでも約五百本の大塔婆を一人で書きあげる総長は大変である。真夏の暑いさかりにシャツ一枚となり、一カ月以上もの間、朝から晩まで一生懸命に書き続けておられる総長の姿には、自然頭の下がる思いがする。別院の塔婆供養の始った四十年前、わずか十数本であったものが、今日このようになった背景には、こうした歴代開教使の方々の無言の努力、無言の教化が続けられてきたことを、私たちは忘れてはいけないと思う。

こうして、いよいよ最後の夜、別院では「精霊送り」の準備が始まり、お盆中に供えられたすべての供物が「西方丸」に積み込まれる。午後七時ちょうど、別院内に響く半鐘の音を合図に、精霊送りの一行は、約三キロほ

ど離れたケワロ湾へ出発する。その先頭には一行の安全のため、十台ものパトカーが護衛にあたってくれ、行く先々の交通をすべて止めて待っていてくれる。「西方丸」を積んだトラックの上では、開教使の打つ鉦が町中に鳴り響き、そのうしろには何十台もの見送りの車が、各々提灯をつけて列をつくり、静かに続いて行く。

ケワロ湾に着くと「西方丸」は、漁船に積みかえられる。この漁船は、シビという魚を獲る三十トン級の船で、別院の精霊送りのために、毎年ドッグに入れて整備した後、ご奉仕で出して下さっている。さて、ケワロ湾を出て約五十分、船はワイキキの沖五キロほどの海域に到着。船長の合図で開教使の読経が始まり、提灯に火のともった「西方丸」が見送りの方々の称えるお念仏のうちに、静かに太平洋の海上に送られていくのである。

帰途、日系の初老の船長は、祝い酒だ、といって一升酒を取り出し、みんなに振舞いつつ語ってくれた。「わしはな、この精霊送りをほんとうにありがたいと思うとります。わしは海の中で、もう駄目だと思ふことが何度かありましたが、しかし仏さまに守っていただき、おかげさまでな、今でもこうして無事魚を獲らせてもろ

うとります……」と、この信心深い船長は、今年も無事に精霊を送った満足感からか、上機嫌であった。

船の前方には、ホノルルの夜景があざやかに広がっている。後方を振りかえると、先ほど送った「西方丸」がホノルルの夜景とは対象的に、ぼんやりと遠く波間に漂っているのが見える。高波、低波の中で見えかくれしながら、ゆっくり、ゆっくりと進んでいくその姿は、親しい友人の方々と名残りを惜んでいるようでもある。やがて、波間に見えかくれしていた「西方丸」は、だんだん小さくなっていき、私たちの視界から去っていった。

結 び

ハワイのお盆は、夏の風物詩として、もうすっかりハワイに定着した感がある。たびたび耳にする「ハワイに明治あり」という言葉も、ほんとうのように思える。また逆に、この太平洋の真ん中にある複合文化社会のハワイにおいては、より日本的な文化、より仏教的なものが、日系人はもとより各国の人々に要求されていることも事実である。そして、こうした日本とは違った環境の中において、人々の生活の中に溶け入っていった仏教のおしえの深さに、改めて頭の下がる思いがしてならない。

いのちを考える

(四)

—先祖—

かわりあいを

大切にする心



林 はやし

錦 きん
洞 とう

(東京・三田貞林寺住職
書道家)

○

今年もまた「お盆」がやって来る。ご先祖や新しい仏さまが、この時わが家に帰って来る。軒先でお迎え火をたき、み霊^{たま}を招き入れお花や野菜供物をお供えして、在りし日と同じように、心の中で語りあう。それは日本の夏の風物詩として、ほのかな叙情ともなっていて、今に猶続けられて来ている。

以前にもこの稿で話したとも思うのだが、「叱られた机なつかし手向け水」という句がお盆になると思い出される。……私が幼なかつた岩手の山寺のことである。紅葉のような小さい手に木魚を叩いて阿弥陀経を読まされる。夕暮に近い薄暗い本堂では経文が見えなくなる。泣きじゃくりながら木魚を叩いていくと、師僧が無言で燭台を傍らに置いてゆく。中学に入ってから、学期試験で勉強し

ていても、朝食前に広い境内、庭の掃除、冬は雪かきと、みっちり小一時間はやらされた。師亡きあと静かにふりかえって見ると、その鞭があったればこそ、今の私があって、子弟教育にも責任が持てるのだと思わされる。叱られたことで却って懐しくよみがえって、自然に師の霊前に合掌する。書の道でもまた同じことで師匠の厳しさと恩愛が、しみじみと思い出されるのである。そして自ずから感謝の念仏となり、期待にそえない自分を反省して懺悔の称名となるのである。昔だからそれを通ったのさなどと今の人は言うが、それ以上に人間にとって大切な何かを忘れていないだろうか。

○

この頃は親子の断絶とか核家族とか言われて、このような風潮を教育や政治の性に^{せい}にする。私はそうは思わない。親も子も夫々に責任のなすり合いでしかない。終戦直後の二十

一年春、中学の同期生と上京の時、車中で二人は語り合った。K君は二高から東大へ進み都の建設関係の職場に就いていた。

「俺の理想は東京の人口問題と住宅問題だ。都心集中を如何に防ぐかだ」と、建設畑らしい抱負をまくしたてた。私はまた「日本は敗けた。マ司令部の政策は民主主義を口にしながら、家族制度や大和魂の崩壊をねらっている。柔剣道や書道までも学校教育から追放した。根性のない、なまくら人間を造り出して日本を骨抜きにしようとしている。これから青少年は何を心の支えとして努力してゆけばよいのだろう。俺はこう思う。それには一億すべての家庭から仏壇をなくするな。先祖を守れ。先祖と共に伝統の中に生きようという心が自覚されて来れば、必ず日本は再建される」。……二人の理想は三十年後の今日無惨にも崩れ去ったかに見える。然し、親子の断絶やコミニケートも、先祖と共に生かされてるという自覚があれば、互に信頼し合える

人間関係を持続出来る筈である。

元祖さまは、このような人間の営みや時の流れの遷り変りを、既にお見通しである。濁りの世相に人の性をみきわめられて、そのあげくの果に悟られた凡入報土の「み教」ではなかったのか。それなればこそ今なお生き生きとして私どもの心の中に脈搏って来るのである。ご先祖さまが夫々の時代を懸命に生き抜いて次の世代に託して去って逝かれたということは、後に続くことを期待しまた祈りつつ子孫に夢を托していることである。親が子に、子は親に各々責務と義務を果し合って、連続して窮まることがない。仏檀の前に合掌して、ご先祖のおかげ、ご先祖の努力が納得される時、今日に生かされている自分の有り難さが、しみじみと理解されるのである。歴史的現実という言葉の意味するものも、所詮この認識に外なるまい。

○

もともと人間というものの縦には責務と義務の親子関係と、横には向う三軒両隣り、世間さまのお役に立つように働くことで、この世に生きてる意味が出て来ると思うのである。向う三軒両隣りとは、とりもなおさず社会的責任ということだ、そんなものは全く感じないと、うそぶく人もいるだろうが、その人自身、生れおちて親兄弟から向う三軒両隣りのお蔭なしに生きて来たと断言出来るだろうか、人間孤立しては生きられぬ、阿含経という最も古いお経には、お釈迦さまのおさとしが生に伝えられている。その中に

「此れ有るが故に彼れ有り、此れ起るが故に彼起る」

「此れに困って彼れ有り、此れ無くんば彼無し、此れ生ずれば彼れ生じ、此れ滅すれば彼滅す」

と伝えられている。これは人間の性、悩みというものを見つめて、迷いから欲が出、欲のまま生きることの苦しさ、空しさ、そして年老

い病いに苦しみ、命果ててゆくという人の生涯を説明して、目の前にあるものに捉われて固執する人間の性の虚しさを論じている。此れ有るが故に彼れ起るといふ縁起観は、やがて仏教哲学の基盤となって宏遠な大乘的思索を展開してゆくのだが、人間というものについての考え方は仏教のみに限らず、西洋の哲学者も同様な考え方のようで、つまり「人間とは環境や外界の対象と一定の関連を持つことを自覚した動物」とか、「自分を世界との関係で自覚し、自ら企画、形成し行動するもの」などとしている。

外廻りのものとの「かかわりあい」を持つものが人間であるとしても、所詮人間は個にするものだ。人間の一番大切な「いのち」というものも、この考え方を推し進めてゆけば自ら結論が出て来ると思う。いのちの生理学的な定義では、無数の細胞の動的な分化活動の中で、一定の統制のとれた結びつきを示しながら形づくられてゆくものと考えられる。

細胞の分裂増殖の推進力だけが「いのち」ではない。いのちはずっと大きく深く広い意味でみつめられねばならぬ。

○

私は縁起観というものの考え方に立って、人間というものを「かかわりあい」の中に生きていくものと定義づけている。かかわりあいを自覚し、かかわりあいを忠実に守ろうとする原動力が「いのち」であると思う。命ある限りとか、命をかけてと言う言葉には、その人にとって最高の生き方を貫こうとする充実感安定感が響いて来る。尤もこの頃はこうした価値感を否定する人種もいるが、そんな輩は底も浅く対話もなく却って不愉快になる。やっぱり命をかけて仕事や信念に打ち込んでる姿は爽やかであり明るい。十八年十二月学徒出陣で偵察士官となった私にも、国や同胞のためにという全体観に命を張った時がある。お前達に青春はないと言ったが、その

人は本当に「いのち」が解ってる人だろうか。一瞬一刻の青春が、今の若者には匹敵出来ないほどの充実感があった。古い言葉だが死んで生きると本当に信じて飛んでいたの

芸道を受けつぐ心

私の今の願いは、踊り終って幕がおりた時、「ああ！」と思うことが出来たらと云うことである。一つの舞台を定める時、その振付ける作品の内容は勿論のこと、全体の舞踊構成として、照明のこと、舞台装置のこと、衣裳かつら、その人物の時代風俗のこと等、それらのことを色々な角度から検討してゆ

ある。

無生の生といい、真空妙有とといい、称名正因という先賢祖師の言葉が、生き生きとして人間、命という問いに答えてくれている。



藤間勘紫恵

(舞踊家)

き、自分自身の中でその舞台はどんどん膨らんでゆく。そして稽古を重ね、人間の立体的な能力をつくしてたった一日のほんのわずかな一瞬、一曲を三十分、四十分としたらそれは長い演目のうちに属するから、十五分のものかもしれない。あるいは十分か二十分のものであれ、その内容の時間的問題は別とし

て、性根を籠める。日本舞踊の場合は長期公演はまことに稀で、ほとんどが一日のその数分間であるから、余人は何と云う果敢なさかと思う。しかし踊る者、芸を志す者は、本当にその数分間に全く命をかけてしまうのである。果敢ないとたえ口にしても心からそう思う者はいない。思ったら真の稽古をするはずがないと思う。

それは仏様への祈りと同じことの様にも思う。舞台へ立つ者は、例えばどんなに肉体的条件が悪かろうと、幕が上りその始まりからは、一切の条件は全部消えてしまい、最高の体調、そして稽古に寄ってその分に応じて磨き上げられたものを観て頂くと云うことが常なのであるから、それについて、如何に意にそわず、好き演じごとが出来ない場合があったとしても、それに対しての言訳けも妥協も許されることではない。

世阿弥の『花伝書』には、「真の花を開かせるために、態の稽古と共に心の稽古をして、

さらに工夫考案し、花は心、種は態なるべし」とある。また、「心地に諸々の種を含む。善き雨に悉く皆萌す。頓に花の情を悟り、己がりぬれば菩提の果自ら成ず」とある。心の花は身である。態に即して開く花であるから、心身は相即であり、一如である。

舞台のその一瞬はその観客との、一期一会である。そこに形を残す彫刻、絵画等の芸術と違い、一瞬にして消え去る舞台芸術は、またそれが一会の人の心にもしもとどまることが出来たものであったとしたら、成形をとどめ置くものより、はるかに尊く、またその人の心の中の秘宝は、他の者がうばい去ることの出来ぬ真の宝と思う。

人間は何万年も生きるものではないし、この宇宙から考えれば、その存在は本当に十五分の舞台とひとしいかもしれない。私の一番大切と思うことは、その一瞬に消え去るものへ全く邪念を捨て、稽古にはげみ、全力を尽くして発表するまでのその道程だと思ふ。

然し薄識浅学な私は、未だ悔のなかった舞台は一度もないので、虚しさを感じざるを得ないし、また世阿弥の『花鏡』の中にしめされた言葉を何時も考えさせられることだ。

「舞に目前心後と云うことあり。目を前に見て、心を後に置けとなり。これは以前申つる無知風体の用心なり。見所より見る所の風姿は、我が離見なり。然れば、我が眼の見る所は我見なり。離見の見にはあらず。離見の見にて見る所は、則ち見所同心の見なり。その時は我が姿を見得するなり。かえすがえす、離見の見をよくよく見得して、眼まなこを見ぬところを覚えて、右左前後を分明に安見せよ。定めて花姿玉得の幽舞に至らんと、目前の証見なるべし」。これは必ずしも舞台の上のことだけにかぎらず、大きな意味合いを持つ言葉だと思う。私の希望は、何時か幕がおきた時、「ああよかった」と思うことが出来る時まで、学びつづけたいという願いである。

新刊『共励五十記帖』

○「書道共励会」の創始者林祖洞師とその法嗣で現会長の林錦洞師の発会以来五十年に及ぶ作品の鳥瞰図録。書道芸術に心を寄せる方々に、自信をもっておすすめできる新刊豪華本。

B4判 一六〇頁ハケース入り
表紙 ワインカラー裂地金文字題字
頒価 一〇〇〇円ハ荷造送料共

申込先 〒108 東京都港区三田4-4-17
書道共励会
(振替東京 七七四四七)

取扱 法然上人鑽仰会



泣いて笑って

正しょう司じ歌うた江え

(漫才師)

(一) 心に残る師匠たち

うちがお三味線をはじめとお稽古したのは、七つときやったと思います。このお三味線のお師匠さんという方が女の人で、両方とも眼のご不自由な方なんです。「眼が不自由なのになんでお三味線が弾けるんやろ」、子供心に不思議でたまりませんでした。でも、厳しい厳しい方でした。「清元」、「小唄」、「端唄」、なんでもお弾きになりました。それで私は当時は小さかったので、お三味線

の長い竿の上の方までは、手が届きませんでした。それから、おかしい話なんですが、お三味線をお稽古する時は、坐りまして右足の上にお三味線を置きまして、この右足で調整しながらやつのことで弾ける始末でした。

でもね、稽古はいやで、いやで……、「なんでわたしこんな小さいのがお三味線稽古せにやいかんのやろ」と思いました。亡くなった父親が、「とにかくお前は芸人になる。芸人というのは、なんでもできなかったらあ

かん。七つであらうが、二十歳(はたち)であらうが、お客さんは子供や思うて見てくれん。芸人として見てくるんやから、それにはなんでもでけへんかったらいかん」ということで、ともかくうちはお三味線の稽古に通いました。

当時、中村ちがじ、中村らくさんという漫才のご夫婦の方がいらつしやいまして、この中村らくさんという方が、眼の不自由な方で、わたしにお三味線を教えてくれた方なんです。でも勘のよい方でした。子供やから遊びが先で、途中で投げ出してしまいうなええかげんな稽古をわたしをしていますと、この眼の不自由なお師匠さんが、「どこ弾いてるノ」と、もっておられたバチでわたしの手を投ぐりはりました。わたしの手からは血が流れるほどで、「眼の不自由なお師匠にはこの血も見えんやろ」と思っていますと、「血が出てるやろ。これでふきなさい」と布切れを貸して下さいました。「痛い目をせなさい、わからへんのや。今度、痛い目しとうなかつたら、もつと勉強せにやあかん。真剣にお三味線覚えにやいかん」と、涙ながら教えてくれはりました。なるほどなあ、といまだに覚えております。うちの右手の小指はち

よつとゆがんで、傷があります。これは愛のムチやな……、どんなむずかしことがあっても真剣に立ち向わなければいけません。小指を見るたびに考えさせられます。もうお師匠さんは天国にいつてしまはりました。でも、本当にお師匠さん、「おおきに」、心からお礼をいいたい気持です。おかげで、いまでもステージでお三味線がなかったら、わたしは池から出た鯉と同じでなにもできませんが、お三味線のおかげで生き生きと楽しい舞台をつとめさせていただけます。

それから小さいときから旅回りをしております、きまったところで学校に行けませんでした。それで一座の旅と一緒に回ってくれる家庭教師にいたのですが、ある夏教えていただいた家庭教師は、ご自分が漫才が好きで、とうとう漫才師になってしまはりました。でもその方には大変お世話になったんです。ということは、確か九つぐらいだったと思います。わたし結核を患いました、もうあかんいうところまで行ってしまいました。でも旅から旅で入院することでもけしまへん。その時、この家庭教師の先生が、「入院せんでも、わたしがきつとなおしてやる」と、行くところ行くところで土地のお医

者さんへおぶって連れて行って下さいました。

この先生には、そのほかにもいろいろお世話になり、いまでも大層感謝しています。先生、＼おおきに。＼。

(二) ヤミ屋時代の思い出

うちのお母さんが戦争中亡くなりまして、まもなく終戦になりました。苦しい時代でしたね。でも景気のいい方もおられました。そういう人たちはみなしてはいけないことをしていたのです。たとえば、ヤミ米を売ったり、ヤミブローカーだったり。しかし気の弱いものはダメでした。わたしも子供を背中におぶって、ヤミ米を売って歩きました。子供の足元に一斗ぐらい置いて、胸には二斗ぐらいかかえて、「米いりませんか、米いりませんか」と声を限りに売りました。しかし子供を連れて貧しい恰好をして売っていたので、あまり売れませんでした。

米を一斗売ると、百円か百二十円か利益があったんでした。しかし、一升や二升の細かい商いに、測りをまちがえたりして、せつかくの儲けもダメになってしまうほどで、本当になにをやってもわたしはうまくいかない、

それでいて気の弱い人間でした。

ある日、大阪の住吉さんの近くを子供をおぶって歩いておりました。ネンネコに米を隠しく、「ああ今日も売れへんな」と思ってたポトポ歩いていたんです。そのとき、後ろの方で「もし、もし」とだれか呼んでるんです。振り返ってみますと若いお巡りさん、「子供さんおしっこしてはるのちがうん」「ええ」とはっと後ろ振り返ったら、私が歩いてきたところに米粒がついてきてはるんです。そしたらお巡りさんは、「はやいことおムツかえてあげなはんな」。ヤミ米は当時はすべて没収されてしまうんです。わたしは思わず、「お巡りさん、堪忍して下さい」と胸の前で手を合わせました。でもお巡りさんは、ニコツと笑って行っちゃいました。

その当時のわたしは、本当に貧しい身なりだったのです。そのお巡りさんは、よっぽどわたしが憐れに見えただんでしょうね。事実、わたしは勝手に家を飛び出して、勝手に親不孝をして、勝手に苦労をしていたんですが、このお巡りさんの心づかいが今までにうれしくてなりません。そして、このお巡りさんに会えたらなあ、ときどき思います。

それから、芸人は芸をやってお金を儲けて生活せにゃいかん、と思います。芸人だけじゃなくて、ほかの商売でも、ひとつのことに打ち込んでいる姿はすばらしいものです。うちも芸人のはしくれです。舞台に出たいという一心にかわりはあらしまへんでした。そして、お父さんにあやまって、この父の世話で再び舞台に立つことができたのです。

ところが、東京で舞台に出ても相方に恵まれず、なにをしても失敗でした。そこで京都の演芸館に、うちの先輩であった花柳貞奴という方に相談にいったのです。

このとき、お姉さんは質屋へ行って三千円のお金を借りて下され、自分はどうしても千円は必要なので、二千をうちに貸して下さいました。うちがお姉さんを尋ねて、ひと言もいわないのに、うちの心を察して「死んだらあかんよ。どんなことがあっても生きなあかんで」と励ましてくれました。この二千円のおかげで、現在のうちがあります。いろんな方に助けていただいたわたしは、運のいい女だと思います。でも、このお姉さん、八十近いですが、いまでも京都に住んでいます。お姉さん、
「おおきに」。

(三) かしまし娘

かしまし娘を結成させていただきまして二十二年です。でも今年ね、三人であまりやってないんです。年に四回だけ、大阪の道頓堀の角座の舞台はつとめるんですが、なぜ今年は三人の舞台が少ないかといいますと、やはり姉妹でも夫婦と一緒に、なにか倦怠期というか、あるんですね。二十二年目の倦怠期というのはおかしいかもしれないしまへんけど、いろんな方々の暖かい援助を受けて、本当にいい雰囲気です。二十二年間やってきたんです。専属の会社もありますし、そういう方々の愛情に囲まれてやってきたですが、なにか自分たちホッと気がついたんです。このままでいいのかなあ、ということなんです。

むかしは、女だてらに三人で、話しのネタのことで暴力沙汰の喧嘩もしたほどなんです。お客さまのひとりでも、今日のかしまし娘はおもしろくなかったといわれるのがいやで、こちらはこの舞台そのときに真剣に取り組んできたはず。その気持がその信念が、こうして二十二年の月日を保たせてきたのではないかと思う

んですところが、最近テレビのお仕事などもふえましたが、なにか緊張感がないんです。ネタのことであまり喧嘩をすることもないんです。自分たちで、なにかマンネリズムだというものを感じる、とでもいうんでしょうか。

ひとりひとりになるということは、まるっきり冒険なんです。でも今年からは、本当にひとりひとりでやってみようじゃないか。そういうわけで、わたしたちは一年生からやり直しているんです。ひとりになってなにができるか。

いま、家庭をもって、夫の妻であったり、子供の母であったりしています。芸能界でも、女優となったり、人生相談のコーナーをもったり、いろいろやっています。でも芸人というのは、やっぱり芸人です。いろんなことをやらせていただいているこの頃ですが、なんといってもやはり漫才が好きですね。ということは、小さいときから、この漫才を知りつくしているんですね。最近、ひとりひとりで仕事をしているんですが、この漫才の世界のかしまし娘ということ、かしまし娘の正司歌江、正司照江、正司花江ではなくってきたのではないかという

ことも感じているんです。ということは、ドラマの役柄にわたし自身が、かしまし娘を離れて、正司歌江を離れて、取り組んでいるからなんです。

永い芸人生活で、いまなにかわかってきたようにも思えます。かしまし娘がひとりひとり別々に仕事をさせていたがながら、なにかを身につけさせていたでいてるようにも思えます。今度またかしまし娘の三人で漫才をするときは、なにかまた一味ちがったものが出せればなあとわたしは思っているんです。

〔文責編集部〕

今回掲載させていただいた「泣いて笑って」は、有名なトリオ漫才の「かしまし娘」の正司歌江さんのお話です。三歳ですでに舞台上に立たれ、戦前は妹さんとともに少女漫才として一世を風靡し、さらに戦後は三人姉妹そろって、つねに第一線で活躍してこられました。永い芸道修行の折々の感慨が、この放送にはよくあらわれています。なおこのお話は、六月二日（木）から四日（土）にかけて放送されたものです。

ふるさと紀行

法然寺虫干会の頃



ほそ い しゅん めい
細 井 俊 明

(高松市法然寺住職)

瀬戸内海の中心部にある讃岐の夏は五月に始まる。三方を大きく湾曲した山並に囲まれ北側は海に面している。その海に沿った要素所に都市が開け、仏生山来迎院法然寺は、内陸部の平堅に、男山、女山と連って低い丘をなしている。

日本の西南部に位置する当地は、新緑も色濃く力強く、家の紋を染め抜いた吹き流しと男鯉、女鯉が、緑と青の天地を大きく泳いでいる。

雨気が天地に充滿する六月は、狭い県下に約二万個点在する溜池の水を跳ばして田植が始まる。隅に花や菓子をお供え豊作を祈る儀式の頃から自然は山藤や桐、蓮華つつじと青紫に更ってゆく。

冬場、瀬戸内海から内陸へ、低く地を這うように吹き込んだ風も、この候には、山村の人々の日々の生活のように、朝は都市部へと山を下り、夕方には、家路へ着く人々と共に山を登ってゆく。山を下り、又登ってくる風の切れ目を朝風、夕風といい、潮の満干の停った刻を言う。特に夕方の風を「さぬきの夕風」といって、この時刻は蒸すように暑い。

旧暦六月三十日は仏生山来迎院法然寺の虫干会、俗に

言うお虫干である。虫干は一年中で一番暑い日の一番暑い夕風の時刻に始まる。

大介が法然寺へ自分から弟子入りしたのは汗の行き場もなく、どうにもやりきれぬ虫干の夕方だった。

寺にある少年団に二年間、日曜ごとに出席し、中学の頃から朝夕六時の鐘を撞き通した少年にはこれから始ま



法然上人像

る寺の生活もさほどには感じなかった。大介は寺から一キロばかり南へ下った赤坂筋に家があり、両親共に健在で、両親も家族も別に信仰深くもなく、寺にも今日迄関係なく生い立って来た。素直さと健康は親譲りのものであり、この年齢で人生に無常を感じる筈もなく、寺が好きだったわけでもない。だから弟子になったのである。

寺では来る日も来る日も一日一食はそうめんかうどん。剽敢で鳴る土佐への出城の役目を背う法然寺は、寺域も広く周囲を池と堀で囲み、門前町は籠城用のそうめんが特産になって万に備えていた。

虫干会は法然上人と親鸞聖人のお木像を本尊の左右へお祭りし山腹の校倉から輿でお移しする。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏の大唱和と香の煙、少しでもお厨子を担ごうと群れる信者。わらじばきに印半纏の少年達は腰に丸亀名物のうちわ。ゆらゆら揺れながら輿は本堂の階段を上ってゆく。大介は去年まで先頭にたって担いだ輿を今年は黒染の衣を着て得度式の始りを待つ。次は人々の注目が自分に集る刻の近づきを神経を張り詰めて待っている。

「おいでなさりませ」「お帰りなさいませ」と、年に一

度のお上人様方のご出座に、父母を迎える大切さで人々の喜びが続く。年に一度、法然上人、親鸞聖人のご師弟が、信者の送る曇二枚はある大うちわの風を受けて、ろうそくが消されてゆく。師弟いつまでもかくありたいと願う師の望みか、今日を得度の日に選んだ師の気持も、有難いより、これから行なわれる得度式を大介は、早、睡気と空腹に口を尖らせている。

誰れが何頃から法然上人と親鸞聖人のご同座を一番暑い日の暑い時間に涼しくあられよと考へ行ったのだろうか。今は虫干会の縁起も定かでないが、お二人の気持になつて御同座を企てた人は、よくよく慈愛の深い人だったのだろう。その陰にある叡知。恐らく高松藩初代藩主松平頼重公ではなからうか。

水戸中納言徳川頼房の長男に生まれながら、家督を光圀に譲り、十二万石の当主で終った人。戒名の中に、竜雲と孤峯という字のあるところからもその人柄が偲ばれる。

頭に香水をつけられ、合掌した手が汗ばむうち、名前は大介から雄介と更つて、再び人々の勢はお上人様へ移つて行く。後夜を最後に読経は終り、在家の人々の和讃

や、一枚起請文の唱和からお通夜へ入り、一夜を一つ屋根で過した人々は短夜の白々明けに帰つてゆく。しかし旧暦の三十日は月明もなく本堂を外れたら闇は深い。蚊うなりは高く、それを払ううちわの揺れに人の気配を感じる。闇に夏の精気が充満している。

今年の旧暦六月三十日は、新暦の八月十五日、四国の盆と重なる。気質的に海に強くものごとにこだわらぬ雄介は讃岐人の特性をよく具えて、墓掃除に棚経に活動するが、山頂にある松平家代々の墓地六百基の掃除は、暑さ、蚊、その他諸々の苦痛を含めた夏の行である。少年団入隊の最初の年は、茶だ、果物だ、竹筒だと麓から二百米の山頂まで荷物の輸送。二年目からは、左手に手袋、右手に鎌と慣れぬながらも、涙より辛い汗をなめつつ草を刈り進み、これで半人前、あとは盆明けから始まる少年団の豊島十二泊キャンプ。これが済んで一人前と言われる立場から、言う立場へ。草を刈るより走り廻つて、各班の割当の掃除場所の段取りとかをするうちに、一段と逞しさのついた体を黒く焼き、一年をこの十二泊に込める思いで、早々に盆に別れて御先祖様を西の方十万億土へ送り返す西方極楽丸と書いた、わら船の浮ぶ海

へと乗り出してゆく。十五トンの船に団員三十名が潜り込み島から島を巡りながら通行船の大波を受け、揺られるのには慣れているものの、やはり緊張感に伴う。

浜に着けば、まづ一泳ぎ。これから一年中の最も密度の高い海への回帰が始まる。隊長からの「血液は塩水と一番成分に近い、人間は海と雷から出来たんや。うんと泳げ」という言葉に雄介は上級班長として緊める事を忘れず、仲間の束ねや、ここでも段取り。しかし一夜明ければ餓鬼大将に早更りするが、朝礼だけは制服制帽・国旗儀礼に誓と掟の唱和。あとは一日中、水泳はもとより、浜辺の野球・相撲にラグビー、三度の食事当番。時刻を識るのは沖を通う定期船の起す波。夕方五時五十五分の定期便の立てる波は、一際大きく感じ、波が岸に着く迄に、国旗の降納。塩の吹いたいがぐり頭に水を被るのも、もどかしく当番班のつくった夕食へと移ってゆく。あとは何もない薄暮の三時間。ひっそりと海浜動物になりきって空を見上げるもの、海をみるもの。一夜一夜を重ねるうちに、日々の泳ぎは動物達の冬眠用の餌集めのように、せつせと雄介達の脂肪を汗にかえて取り除き筋肉を残してゆく。赤フンドシと体の色に区別がなくなっ

た頃、沖ゆく連絡船の人に、こいつら一年中キャンプやるのか。島の人からは、「テントで島に居付くんとちがうんな」と思われる頃やと島から離れてゆく。何故か例年雨の降る朝が多い。

こうして、これからの三百五十日は、「来年ここへ来る為の用意の日やなあ」と雄介達に思わせるわけである。そしてその九月の雨は重い。

「浄土」教化トラクト

『おぼん』

B6判・表紙共八頁

定価一部二十円(二〇〇部以上 十八円)

送料実費

発行 法然上人鑽仰会

■読者の声■

机上の銘石について憶う



しみ ず えい
清 水 栄

(号傘寿・八十翁)

君の頭の禿げ具合では百歳には違ひの
に、「机上の石くらい」と、その言葉をも
遜だと憶う。

この石は日輪を離れ、火の玉が冷え、地
中、水底よりの所産で、語りこそせね哲学
者だ。

人の眼にも触れずに億年もすぎ、海岸
や、河原に洗い出されたのは、最近の風水
害による。

有り難い日輪のみ光りを拝したのは、同
類千億の中の一つよりも稀れであつた。

地上に顕れた石の中より、この机上にの
つた石を憶う。

石にも千万の姿あり、撰ぶに人様々の好
悪があり、両者の一致によつてこそ、この
机上に坐するを得たのだ。

仏道では三世を信ぜざる者を外道と云っ
ている。

吾々六道を輪廻して、やっと人の形をし
て、現世のみ光りに遇えたのと、この机上
の銘石と私との出会いの不思議さ。昔を語
れやこの石、吾等よほどの前生によつて、

人と生れ石も拾い上げられ、磨かれてこそ
銘石なれ。

吾々も生を享けただけでは、生れこし甲
斐はない。

信心を得させて頂いてこそ生れこし甲斐
はあるなれ。万衆すべて皆輪廻の同胞で、
人生への稀縁を求めて、六道を馳せてい
る。

「生れ難き人生に遭ひ仏縁に会う」すべ
てのものは日輪のみ光りを求めて、一日千
秋の想いをこめて泣き哭いている。

やつと仏のみ光りの世に出させてもらえ
た吾々が、信心を得づして、日の光りもな
い暗黒界へ終ろうとするか。宝の山に入り
ながら、手を空しく腐るのか。

明治末年頃に教えられた小学一年生の唱
歌に、

- 一、雀々今日も亦暗い道を唯一人林の奥^が
の竹藪の淋しいうち帰るのか
- 二、いゝえ皆さんあそこには父さん母さ
ん待っていて楽しいおうちがありま

する

さよなら皆さんチュウチュウチュウ

「有明無明」は吾々の信心にありて、心は天地と開けます。

吾村の先覚者、庄屋役の元禄七年隨筆の中に、

「砂を集めて塔となし、草を結びて寺と名づくる人は、真に仏智に契い、朽木を取つて仏と称する族は忽ちにして、正覺の縁となるものなり」

と万有すべては同胞だ。み光り遠いと歎くまい。活眼をもつて坐右を眺めよう。平凡らしく粧う事物は、吾等に何を語り何を教えているかを。

み仏の御加護と御両親様の御胤のよかりしや、数十年來も医者無用、還曆にして職場を退き、世帯を子息夫婦に譲りて二十年、年中、震朝四時起床、夕九時就眠と習慣づけた。

木魚の音にも高声念仏にも自ら処あり、膝小僧や赦せよ、火の用心に線香の火も寝

かせてのおつとめである。

朝な夕なの感謝拜礼、自然に湧く御法悦、何もののこれに勝るものがあるうか。これぞ私の生き甲斐である。

粗末ながらも、累代御親の拝された御仏壇に珠数にも似て連綿と日課念仏相統を恵まるる、この頑健に涙する。

最近殊に流行し出した御仏壇新調や総廟式墳墓も、拜まなくては徒らに御座敷の応接台と変りはない。

私たちは仏意に副して、無償の働きにも生き甲斐を見出し、善因善果の理をよく弁えて、徒らに目前の小慾に久遠の法悦を失つてはならない。自省こそ縁となれ。

折角得させて頂いた、自身の領解を衷に述べて、喜べるこの境地こそ大切である。

嬉しさを他人に伝えて同信の手を繋ごうとしても、想いの半ばも通ぜず、時には反論を招き謙虚さを失う。

大勢集まっても理論めいてくれれば、外し方がよい。

理論で世の中がよくなるものなら紀元二

千年、世俗とは云えモット皆が心豊かになっている筈。掌を合すべき縁りの集りに悪相の生ずる愚かさよ。

形よく大きな五令蚕繭となつても、例えば蛹とならばに真黒な「腐れ蚕」となつて、自らの醜惡はまだしも、周囲の純良白繭を汚損させたのを見た、養蚕家は正時代生れまでの人には見覚えのあるはずです。

幽かながら尊いみ光りを頂いたのを四令蚕繭（五令蚕まで食桑せつに少し早く成繭する異例蚕）に譬えて、幾分小さな蚕ではあるけれども、健やかな蛹のこもる繭となるべく立派な往生をこそと念願している。

幸にして愚鈍は愚鈍ながらの毎月を世間の理解と恩沢に看護られ、自然随順に生きさせて頂いて「思い煩うこそなき」大きな御手の上にある有り難さを憶う。

老来高趣味（郷土史、古文書解説）一辺倒に欠伸を知らず、寧日のない張りつめた日常を感謝している。

想

随

心のままに〔六〕

川内知光
かわうちちこう

先祖(一)

悲しい時に同じく悲しんでくれるのは友情ではあるが、真の友情とは言いがたい。

人は新聞記事を見ても泣くことがある。嬉しい時に喜んでくれる人、腹が立つ時には立腹してくれる人、これが友情であろう。

ある人が、賞状を座敷にかけておいたところ、いつか知らぬ間に養子が片づけてしまった。ところが、その掲げてあった賞状はその家の名譽である。その家の先祖の誇りであるはずだ。その養子は、その家の人になり切っていなかったのである。こまった養子を貰ったということでもあろう。

話はまた私事になりますが、私が役人をしていた時、天皇陛下の御入洛せられる時

には御召列車到着のプラットフォームにまで、お迎えに行ったのです。ところが、そこにはシルクハット(絹帽)が必要だったのです。中学校の同級生に父が検事正をしてたF君の家には絹帽が多分あるだろうと思つて、急遽借りに行ったのです。ところがF君は「家には父の絹帽があることはあるが、僕は二十円ほどのものだから、買つておいた方が良いと思う。何年かして後、家のお祖父ちゃんがこんなものを被つていたという先祖の誇りになるのではないか」と言うのです。私はその通りと思つて買ったのですが、陛下のお迎えに二回と、後になつて、高校生の女の孫が仮装行列のためにこの絹帽を被ったことがあるので、都合三回使ったことになります。そして、それだ

けで倉庫の棚の上に長く眠っております。

先祖(二)

亡くなった母は私が男の子を幼くして二人も失ったので、私の兄の供養がしてないからではないかと申ししていたことがあるのです。私はその頃は三十歳位であまり気にしていなかったのですが、ようやく年をとつてから体の調子が大変悪くなった一時期があるのですが、その時、母の言葉を思い出したので(少し遅かった感もなきにしも非ずですが)。それで、母の出生の寺である京都府下山城町西音寺に赴いたので。過去帳を調べたのですが、記載されていないのです。考えてみると私は長男なのです。死産以前の死亡でないかと思つて「蓮生胎児」という戒名をつけて、祠堂料をお寺に納めて帰つたのです。そして、その年の十一月にお十夜のお説教に招かれて、泊りがけで出かけました。一席終つて部屋に帰つてしまつたのですが、お住持が「皆さま待つておられるので出てきて下さい」といわれるので、下座の一週に席を取りました。

すると、「おつねさん（私の母）とは、長い話をしたこともあり、そのことがまだ目の前に残っていますよ」とか、智賀栄さん（私の姉）と砂遊びしたとか、懐かしい話が出まして、和尚が亡くなるまで毎年お十夜にお説教に赴いていたのであります。

先祖(三)

かつて私は京都市の保母の養成講座というか、それに講義に招かれたことがあるのです。その時に、どのような都合で言ったのか記憶がないのですが、「皆さんの中で十代以上続いた家の人は手を挙げて下さい」と申しますと、二人の人が手を挙げました。「ハイ、貴女は何代ですか?」「十代です」「貴女は?」「十六代です」「それではお聞きいたしますが、十一代前、十七代前は一体どうなっていたのですか。泡のようにぽかっとこの世に湧いてきたのですか。皆さんの家はイザナミ、イザナギのミコトよりもっと古くから連綿と続いていることはお分りでしょう。これはお寺との縁が切れて、何かの都合で他所に移って、先

祖との縁を自分の手で絶ち切ったからではありませんか。お寺の方では無縁仏の処置に困っているのですよ」とお話をいたしました。自分の先祖というものについて、何か考えてもらいたかったのです。

先祖(四)

戒名に院号というのがあります。これは普通、お寺に功績のあった人に差し上げるものです。私の寺、西方寺には吉田某という檀家総代の人がおり、台風が来ると、自分の家は第二にして屋根に上って瓦が飛んでいなかを見て下さる、まことに模範的な総代さんがあります。この方には院号は無条件です。

ところが功績もないのに、院号の注文をしてくる人があるのです。功績は体が財です。それで、その財施を頂くのです。私の場合はまづ本堂の什物を寄附して貰うのです。余った金の利子は、回向料として毎年春秋二季のお彼岸には祠堂回向として追善をすることになっております。院号を買ったという人がいますが、これは間違いであ

ることはわかっていただけたと思います。「院号をつけて何の効果があるのですか」と問う人があります。それは前項の絹帽（シルクハット）と同じで、「家の祖先には院号がついている、僕らも頑張つて、また院号をつけて貰うために努力をいたしましょう」と、皆さんの励みになるのではないのでしょうか。

先祖(五)

「お父さん、ご先祖、ご先祖と檀家の人と言っておきながら、一体大体川内家はどんなっているのですか」「良い質問だ。私の時代には家のあとを継ぐ者は、兵隊に行かなくてよかったので、つまり兵隊養子というわけで、沢山の人が名前を替えたのです。私はどういう訳か、大阪か何処かに住んでいる独り者の川内というお婆さんの養子に行ったのだが、とにかく二、三年分の生活費を渡して川内という名を買った訳で、仕方なしに川内家先祖代々とおがむより詮がないので、長年左様になっているのだ」という風に説明した。

篤信岩船家のこと

須^す
藤^{どう}
隆^{りゅう}
仙^{せん}

(函館市称名寺住職)



毎月『浄土』がくるのが楽しみです。恩師や有縁の方々、妙好の方々のご高文に魂を洗われ、毎号有難く拝読させて頂いております。

とくに最近では、四月号を開いて、一瞬驚くとともに、大変有難いことだと合掌させて頂きました。それは岩船修三画伯の人生読本「ユーカラを描く」が載っていたからです。後文にもありましたとおり、岩船家は私が奉仕させて頂いております称名寺のお檀家であられます。篤信のお家柄で、土地でも名家として広く知られております。岩船画伯も平素私がお世話になって種々ご高

教を頂いているご立派なお方であられます。差出がましいようですが、少々岩船家とお念仏のご因縁についてご紹介上げたいと思います。

○名園「香雪園」

私の住む函館というところは、安政初年に下田、あるいは神奈川・長崎などと共に開港された由緒ある町で、かつては北洋漁業の基地として、北海道の経済を左右する景気のいい町でありました。しかし第二次大戦以降は

すっかり火が消えたようになってしまい、最近は僅かに観光都市で全国に知られてはおりますが、斜陽都市などといわれている現状です。無常の世の中ですからこれも致し方ないことでしょう。

しかし景氣のよかった時代の遺影は、いたるところに



函館市称名寺にある

岩船家の墓

見られます。その一つに、温泉で有名な湯川の奥に、見晴公園という素晴らしい大庭園がございます。その広さは想像を絶し、来園者を驚かせております。これが実はこの岩船家の別荘なのでした。岩船家の家印を久メー（きゅうしめいち）といい、見晴公園と呼ぶよりは「香雪園」と称したもので、それはここにある梅が、春に先駆けて雪中に香るから名づけられたものでした。広さ約四万三千六百坪、丘陵あり、溪流あり、滝や池あり、勿論広場もあって、茶室・温室を備えた純日本式の庭園であります。庭木四十七種六千六百本、立木九種千八百本という数で、大阪や埼玉県安行から名木を運び、近村から大小の庭石を集め、京の庭師が築園したのでした。昭和三十年市に無償貸与し、その後移譲して、市では隣接のゴルフ場と併せ、見晴公園として市民や観光客に開放しているわけがあります。

○岩船ヤス女

さてこのような立派な別荘を有した岩船家というの

は、どういう家柄かと申しますと、呉服商で函館屈指の豪商と称され、しかもその身代を築いたのは、岩船ヤスという女性だったのです。北海道庁の手を経た『北海道史人名辞典』というものがありますが、それにこのヤス女の経歴が載っていますので、左に紹介いたします。

「富商にして篤行者。箱館区弁天町の人、文政元年に生まれた。家もと甚だ貧しく、父峰次郎僅かに飴オコシを売って一家六人を養った。ヤス二十五歳の時、父病死し家庭の荒寥一層を加えた。ヤス商人より木綿類を借受け行商して生計をなし、よく母に孝養を尽し厚く弟妹を愛育した。弟宇之吉久しく病んで起居自由ならず、薬を買って与え懇ろに介抱して全癒することを得たが、宇之吉は嘉永三年他国に赴いて遂に帰らなかった。ヤスはいよいよ心を勵まして業に従い（中略）、付近に貧病者あるを見れば母に告げて自ら食物等を持参して施与することを忘れなかった。かかるによって嘉永五年八月、松前藩より銀二枚米二俵を、明治元年五月函館府知事より白銀若干を、三年八月開拓使農政掛

より米五俵を賞賜された。衆人ヤスの行為に感じて同情を惜しまなかったので、生業年を遂って繁昌し終に太物商をもつて家を興し、十三年には年内の売上高二十万円余に及ぶに至った。平生勤勉にして少しもおこたらず、すでに富める後も仕入のため、徒歩にて東京に往復すること十六回に及んだといわれる。ヤスもとより頭脳明晰、日々の売買は悉くこれを記憶し、夜番頭をして記載計算せしむるに毫も違ふところなく、また雇人を使役するに慈愛をもつてしたので、よくその心服を得た。その赤手より起って遂に函館屈指の豪商となるに至ったのも全くゆえなしとしないのである。ヤス夫を迎えても老母の意に適せざらんことを憂えて、生涯独身を守り甥峰次郎を養って家を嗣がしめた。明治二十五年九月歿した」

○坂田良弘師への外護

このようにして誠に稀有の篤行者岩船ヤス女によって家礎が確立し、その後の同家は明治・大正・昭和と続いて、戦後店をたたまれるまで函館の紳商の地位を保たれ

たのでありました。いま当主（孫次郎氏）は神奈川県相模湖にお住いであり、修三画伯はその弟さんで、他にもご係累は函館その他で文化人として大きな活躍をしております。

しかもこの岩船家は前記のように、大変な篤信の家柄であります。称名寺には同家が寄贈されたお仏像、什物等が遺されており、一時代、寺門の経営は実にこの家



岩船修三画伯筆による

称名寺本堂の油絵大仏画

によって堅持されたのでありました。とくにご紹介申し上げたいのは、ある浄土宗の学僧が、岩船家の外護により、宗乗（浄土宗の教義）の書を前記香雪園で書いておられるという事実であります。

その学者は坂田良弘上人であり、その著書は『鎮西聖光上人の教学』であります。坂田上人は熊本の方で、長じて東京駒込の十方寺のご住職になられ、大正初年、浄土宗が北海道開教に力を入れたさい、その監督的役務で幾度も北海道に渡りました。称名寺二十世小川徹竜上人とはとくに親交あり、ほとんど称名寺に止宿されました。そんな関係で自然に岩船家とも知り合うようになり、同家の尊信外護を受けられるようになり、昭和六年の夏、香雪園に宿泊して『鎮西聖光上人の教学』を纏められたのであります。坂田師はその序文に次のようにいっております。

「我が師……予を愛護すること頗る深甚であつた……薄か其追恩の微表を表せむがために……予と因縁浅からざる鎮西上人の教学を書くことに決心した。昨冬十一月筆を執り、翌月浣本論だけ脱稿した。尚ほ今春に入

り、考察したことは、鎮西の教学は竜樹菩薩に基礎を
置いて居る……而しながら、寺役塵務頻々……されば
寧ろして静慮冥想、晏如として筆硯と親しむ能はず、
依て八月三日万障を排して、函館に渡道し、更に閑寂
の香雪園を選び、此に僅かに二旬余日の間に、本書を
纏めることにした……本書の脱稿を告げしは函館市岩
崎峰次郎氏の厚意に依ることを感謝す」

そして、「昭和六年八月二十七日、北海道函館市外湯川
岩船家別邸香雪園南窓下、坂田良弘識」としておられま
す。

このような立派な宗書が、北海道南端の一隅、岩船家
の別荘で完成されたということは、なんとという尊いご因
縁でありましょう。同書はその十月、東京の浄土教報社
から出版されました。素晴らしい名園で、坂田上人が筆を
執られたお姿が目には浮ぶようであります。

○岩船家の仏縁

私事で恐縮ですが、小生が函館郊外の森町というところ

の小寺におりました時も、当主孫次郎氏から大変お世
話を頂いたことがございます。

修三画伯はまた、昭和二十八年、称名寺の本堂須弥壇
(ご本尊様をご安置する壇)の両脇に、油絵による大仏画二
枚を画いております。これは当時としては珍しいもので、
地元の大きなニュースになりました。金箔や極彩色
の周囲の荘厳とよくマッチした、素晴らしい画でありま
す。これは、かの「当麻曼茶羅」の部分模写したもので
す。

以上のようにして、岩船家のご仏縁は大変なもので、
四月号の画伯の文を読まれたお方は、拙稿でいくらかな
りとも画伯のお家柄、その人々をお知り下され、「なる
ほど、それなればこそ」と頷かれるところがございます
たなら、小生の秃筆も徒勞でなかったことになり、甚だ
差出がましいことでしたが、以上ご紹介させて頂いた次
第です。

『浄土』誌の購読希望者を広くご紹介下さいませ。

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三國志

(三九)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

法然の禪室がある東山の大谷へ登ってきた俊乗房重源は、眼をみはって立ち止まったのである。

この前、文治三年の四月、鎌倉頼朝への釈明状を求めて訪問したときとは、禪室の周辺ががらり一変していた。

法然の禪室は東山の山腹、おい繁る草原のなかにかがみこむようにして建っていたものだ。法然が黒谷から下山し西山広谷に住した草庵をそのまま移築したもので、間取りも狭小で、用材も古かった。

建物はそれ一戸しかなく、法然は数人の門弟とひっそ

り棲んでいた。外縁の端に腰をおろしただけで気安く法然と言葉をかわすことが出来た。

ところが今、文治五年の八月一日のことだが、真葛の原を越えた登り口に、木の香も新しい堂々たる房舎が新築成っているではないか。しかも房舎には善男善女が密集し、あふれ出た者が強い夏の日ざしも意に介しないで、真剣な表情で耳を傾けていた。

法然が説法をしているにちがいない。

わずか三年足らず、念佛ひじり法然の人氣が洛中で爆発的に高揚した事実を、重源は認めぬわけにはいかなかった。

重源も房外にただずむ群衆にまぎれこみ、法然の声を

＜京都東山大谷禪房＞



前号のあらすじ

「仕度第一」と呼ばれた俊乗房重源。法然上人の禅室で、鎌倉の情報通住蓮房から聞かされた話に窮してしまった。義経一行の逃亡に関して頼朝が高野山蓮華谷のひじりを中心とする勧進組織に疑惑を抱いている、というのである。いうまでもなく重源はこの組織の統領格、勧進上人の位にあったし、義経一行が奥州まで逃げることでできたのも、この組織が奥州藤原氏と京をつなぐパイプであったからである。義経一行が勧進の使者として逃亡を続けたことは、歌舞伎の名作狂言のひとつ「勧進帳」が物語るところである。重源はこの窮地を、蓮華谷のひじり達と縁を切ることと、法然上人の頼朝に宛てた書状とによって救われる。

頼朝からの疑惑も晴れた重源。久しぶりに法然上人の禅室を訪れた。そこには房舎も問法の人々も増えていた。そして、そのなかで情熱的に説法している安楽房の姿があった。

とらえようとした。

だが、房内から洩れてくる声は若々しく別人のものであった。

「誰が説法をしているのか」

重源は烏帽子姿の荷をかついだ下人にささやいた。どこかへ主人の荷を届ける途次、立ち寄って問法しているにちがいない。

「安樂房どのです」

「安樂房……法然房は？」

「今日は他日なさっているそうで、じきにお帰りになるとか。安樂房どのがそれまでの「時ふさぎ」をなさっているのです」

「安樂房とは聞いたことのない名だが」

「最近、門下にはいられたお若い方で、前ノ小納言の御子中原師広卿でございます」

この下人、熱心な念仏ファンらしく、法然門下の内情に精通している。

洩れてくる声は音質も若々しく、語る内容もかなり激しい。

「念仏こそ唯一無二の人間の道だ。往生の問題だけではなく、日常生活の隅々にまで念仏信仰を浸透させねばならない。そんな内容を強調している。」

重源は視線を右上方へ移した。

この新房舎の北方の山腹にも新しい房舎が完成していた。

この文治五年の時点、東山大谷の法然禪房は三つの房舎で構成されていたと言われる。

西山広谷から移築した庵室は中ノ房と呼ばれ、法然自身が以前のまま起居していた。現在の知恩院、御影堂（本堂）のあたりに位置していた。いま群衆が聴聞しているのが下ノ房で、現在の山門の西南方にあった。山腹に見えるのが上ノ房、鐘樓の東北にあたる地点に建てられていた。

門弟が急増したのと、おびたしい聴聞者が朝夕に押しかけるようになったからである。

中ノ房の方から若い僧がおりてくる。見おぼえのある顔だった。

「重源さまではごいませぬか」

先方も気づいた。

「法然のご房は？」

「今日は招かれて月輪の御殿へゆかれました」

内弟子の真観房感西はこともなげに告げる。

月輪の御殿とは関白九条兼実の屋敷ではないか。

「何の用事で……」

そこが現在、政治の中枢となる場所だけに重源は聞き捨てならない。さっき大原の樹林で聞いた明遍の話と密着した用向きではないのだろうか。

法然の念仏思想を利用して天台座主へ駆けのぼろうとする顕真法印。実弟慈円僧都との関係から閔白兼実はそれを阻止しようと図るにちがいない。法然自身は、この渦まく政治の奔流のなかで、どのような地位に立たされているのであろうか。

「浄土のご法文についてお訊きしたいと言うことでした
が」

「一人でまいられたのか」

「いや、信空さまが一緒にございます」

目的はどこにあるのか判らないが、天下の閔白宰相が陋巷の念仏ひじり法然を自邸に招くとは容易ならぬことである。法然の念仏思想が庶民の間における微小な動きではなくって、いふ事実に立証している。

「ところで……」

と重源はいま下ノ房が説法をしている安楽房について感西に訊いた。どんな人物で、いつごろから法然門へはいったのであるか。

さっきの念仏ファンより、さらに精細に真観房感西は説明する。

師広は大外記中原師茂の孫にあたる。父は師秀と言っ

て少納言、夭折したためにすでに幼いころから禁裡に出仕した。文治二年五月二十六日の最勝講で堂童子を勤めたり、同年十一月八日の節会には鈴奏の役を果たしていることが、兼実の日記「玉葉」は明らかにしている。

その美形美声と、鈴奏などの音曲の道に天賦の才を持つ点で、後白河法皇の寵愛を深くした人物だという。

法然との結びつきは、たまたま安楽房が鎌倉へ法皇の使者に随行していった折、かの地にいた住蓮房と親しくなったのがきっかけであった。

「住蓮房となあ」

重源は、とまどった表情になる。

住蓮と言えば自分が導いて念仏の世界へ入れてやった男ではないか。その住蓮が今度は仲介者となって若い貴族を法然門へ導いたというのである。

「最初は住蓮房と必ず一緒にいたが、近ごろはひとりです。毎日のように此処へやってまいります」

「そして法然のご房にかわって説法か」

「なかなか能弁な方で、問法する人も多いようです」

感西は下ノ房に群らがる善男善女へ視線を投げた。しかし、視線にはいささか鈍った光りもこもっている。

「さつきから小耳にはさんだだけだが、法然のご房と違つて話の調子がだいぶ昂かぶっているようだか」

「そうお感じになりましたか。私もあの方の上づいた調子が気にかかります。お師僧さまもはつきりとおっしゃっておられます。あの人はわが門弟ではないと」

「入門しても門弟ではないのか」

「念仏を通じての知己にすぎない」と

「知己か？　では門弟とは」

「黒谷このかたずーっと随仕してまいった信空さまや手前どものことをお考えなのでございましょう」

これまでの禅室が中ノ房と呼ばれるようになり、上ノ房や下ノ房が増築されたと言うことは法然の周辺にそれだけ異質雑多なものがふえたのである。法然はそこに劃然と一線を引こうとしているのであろうか。

二

後年のことになるが、建久九年（一一九七）の四月八日付けで法然は「没後起請文」という文章を書き遺している。自己の個人財産を門弟に分与する遺言である。

弟子多シト雖も入室者ハ僅ニ七人ナリ。所謂信空、感西、証空、円観、長尊、感聖、良清ナリ。

この七人にこまかく遺品分けを記述したあと、

此ノホカ旧交ニ非ズト雖モ当時同法ノ三人、所謂遵西、直念、欣西ナリ。ソノ証人ノタメノユエニ註シ列ルヌトコロナリ。

遺品分与の証人として、旧交ではないが現在同志である三人を証人に立てた。と書いている。筆頭の遵西が安樂房であった。

さらに法然伝は安樂房にまつわる次のようなエピソードもつたえる。

それは「選択本願念仏集」を編したときだ。法然はその執筆を安樂房に命じた。感西が法門の義を談じ、証空が経釈の要文を引用し、安樂房がそれを文章にし、この三人以外には関与させなかったと言われる。ところが第三章まで書いてきたとき、安樂房が、もし自分に筆作の器量がなかったならば、このような座に加わることが許

されなかったであろう、と風懷を洩らした。

法然はこれ聞き、安楽房に驕慢の心ありとして退け、続きを感じに書かせたというエピソードである。

この建久九年、安楽房も感西とともに二十八歳、証空は二十三歳である。いずれも若年で、九条兼実から求められた「選択集」をこの三人だけに法然がゆだねたと信じていたい。まして同じ年の「没後起請文」で証人にまで推した安楽房遯西を、これしきのことと退けることも素直には受容しにくい。

永年の内弟子ではなかったにしても、いやそれだけに同法の同志として法然は安楽房の信仰の深さや才氣手腕を高く評価していたのではあるまいか。

安楽房遯西はやがて院の女房との不倫の罪を問われて斬首の刑に遇う。法然が讃岐へ流罪になった事件の主役でもある。専修念仏がすでに合法教団になろうとした時点で書かれた法然諸伝は、法然と安楽房との親密な間柄を引き裂こうとする造意を含んでいたとも考えられる。

小説的な論法を以てすれば、そんな造意があればこそ「選択集」は安楽房自身の手になった述作だと推量したくなるのである。まさしく「選択集」は明恵上人がそれ

を熟読して驚き、かつ嘆いて「摧邪論」を書かせたほどに、旧体制の仏者たちを心底から震撼させる衝撃の書であった。

それにしてもこの文治五年の夏、俄かに法然の身边で昂かまった大衆人気。それを煽動する安楽房たち新しい念仏ひじりの出入りが、感西ら古くからの門弟たちに異和感と不快感を増量させたのも事実であろう。

すでに下ノ房に集っていた群衆は散ってしまった。夕景が迫っても未だ法然は月輪御殿から戻らないのである。

重源は法然の居室中ノ房に坐っていた。

美形な若者がはいって来た。香染めの狩衣に鈍色の揉み烏帽子はごくありふれた俗装だが、その烏帽子を無造作にもぎ取って重源に会釈した頭頂には一本の毛髪もなかった。奇麗に剃りあげている。

僧にして僧に非ず。俗にして俗に非ず。念仏ひじりの典型的な風俗と言える。

もちろん安楽房は重源のことを知りつくしていた。住蓮房という存在が楔の役割を果たしている。

「住蓮は鎌倉でだいぶ動きまわっているようだが……」

「それは、あなたの方がおくわいでしょう。蓮社ひじりの長でいらっしゃるから」

安楽房は微笑んだ。

たしかに重源は高野山蓮華谷の長で、そこに集るひじりたちを支配してきた。世間では勧進ひじりとも蓮社ひじりとも呼んでいた。住蓮というひじり名自体もそこから由来する。

しかし文治三年、頼朝の疑惑を解くために重源はこの蓮社ひじりたちとの交わりを絶っているのである。住蓮とも鎌倉へ向う直前に東山の禅室で久々の再会を遂げたきりになっている。

「鎌倉の武家政権は……」

と、安楽房は言葉をおさえつつも政治の現情を分析しはじめる。

頼朝將軍は関東各地の武士団の頂点に立つ存在だが、その主導権は御台所政子の生家北条氏が握っているという。

そもそも北条時政が頼朝を擁して伊豆で旗上げをしたとき、北条家には天下をうかがう兵力も財力もなかった。あったのは平家の支配に不満をいだく坂東武士団の

感情だけだった。この不満が、源家の御曹子頼朝を統領に頂くことによって新しいエネルギーに点火するであろう、と計算したのである。

いまその打算是無意味なまでに的中した。

源家への忠誠心――

そんな道義や感傷は微塵もなかった。坂東の武士団は利害だけで動く。と言うよりも家ノ子郎党を養い、わが領土の安堵を願って、機敏に変心し、老獪に先読みをするのである。

石橋山の旗上げで失敗した頼朝だが、海路三浦氏のふところへ逃げこめたことで、企図は再出発を可能にした。三浦と千葉の武士団は量的にも強大であった。石橋合戦の当時は平家方の命令に従って頼朝を追撃した熊谷直実や梶原景時らも手の平をかえすようにこの白旗の下へ馳せ参じてきた。

頼朝と北条家とは一心同体だ。彼らはその政治力、知能だけで坂東武士団を掌握し、都へ攻めのぼってきたのである。

もちろん頼朝自身は平家追討の応いにあっても鎌倉の地を一步も動くことが出来なかった。地元からの叛乱を

監視していなければならかったからである。

弟の範頼や義経が前線の指揮官となつて平家追討の大業を完成した。京都へは北条時政が乗りこんできて、さまざまな政治的な手を打った。

平家を滅亡させた直後に政治上の危機が一度あった。

頼朝のこうした不安定な立場を熟知した後白河法皇が、戦後の京都に滞留していた源九郎義経に「頼朝追討」の宣旨を下したことである。

「あのころ、私は何度も高階泰経どのに随行して鎌倉へ下ったものです」

と安楽房は回想する。住蓮房と鎌倉で出会つたのもそのころだった。

「頼朝追討の宣旨はじきに取り消されたはずだが」

「そうです。関白兼実公の卓見によるところです。兼実公は公武の合体を構想されました。うち続く戦乱に終止符を打つためには京都の公卿と鎌倉武士が手を握らねばならないと……法皇はお嘆きになつたものです。公武が握手してしまえば、すでに天皇の大権は永遠に戻つて来まいと」

「そんな法皇のおそばにいて、そなたはどう感じたのか

な」

重源は興味深い眼で、若い公卿出身のひじりを見つめた。

「お嘆きになる気持は良く判るのですが、すでに時代が変革しております。天皇親政は遠い昔の話ですよ。これからは武家の時代です」

きっぱりと言いきるのであった。

武家の政治——それだけではないとも安楽房は言葉を添えた。

「仏法も、です」

「仏法もか」

「はい。宮廷や貴族の手で支えられてきた仏法は滅びの道をたどらねばならぬでしょう」

安楽房の若々しい面上は、革命児のたぎるような熱血でおおわれていた。

三

「新しい仏法とは？」

重源は、若い安楽房の熱氣に圧倒され眼を伏せるようにして訊きかえした。

「此処です。此処に新しい仏法が芽生えつつあるので
す」

「此処にか……」

「法然お聖人を頂いた念仏門だけが明日の仏法の、いや
この国の新しいにない手となるはずです」

安樂房は、すでに歴史を予断していた。予断したから
こそ頭頂を丸め、在俗のひじりとなって法然のふところ
へ飛びこんできたのである。もちろんその過程で住蓮房
と肝胆あい照らし合ったにちがいない。

住蓮房は鎌倉で念仏ひじりの結社を作り、精力的に布
教教化につとめているという。とりわけ北条氏、頼朝の
正妻政子には深い接触をたもちつつある。武家政権の心
臓部だからである。

「四十八巻伝」は北条政子が法然に念仏の奥義につい
て教えを求めた消息を、その二十五巻でつたえている。

鎌倉ノ二品禅尼、帰依モトモフカクシテ、蓮上房
尊覚ヲ使トシテ、念仏往生ノ事尋ネ申サレケレバ

とある。

いつのことであつたか不明であるし、使者となった蓮
上房尊覚が誰であるかも明らかでないが、蓮を名乗った
ひじり号から推理して住蓮房の同志であつたと思われ
る。

「吾妻鏡」は正治二年（一二〇〇）の五月十二日にこん
な記事を書いている。

羽林（將軍頼家）念仏名僧等ヲ禁断セシメ給ウ。是
ハ黒衣ヲニクメシメ給ウノ故云々。

すでに「黒衣」の問題として前にも触れたが、黒衣が
政僧の象徴として禁色であつたのに、鎌倉の専修念仏者
たちが平然とそれを着て市中を歩きまわつたのを咎め立
てたものだ。

將軍頼家の正妻の生家である比企氏は十四名の念仏ひ
じりを引つ捕らえ、その黒衣を剥いで焼き捨てたと言
う。

ところがひじりのなかで「伊勢ノ称念者」と言うもの
が、その非法を鳴らし激しく抗議したともある。

住蓮房が「伊勢ノ称念者」を名乗っていた事実もある

ので、これが彼と同一人物であったかも知れない。

歴史年表はこの事象だけを取り上げて、

——幕府、念仏を禁ずる

と、書く。

ことさらに禁色の黒衣を着こんで鎌倉市中を横行する専修念仏者たち。政治的な意図をかくそうともしない点からも將軍頼家やその女系である比企氏が憎惡の念を注いだのは当然である。なぜならこの専修念仏たちの背景で北条政子の像が遙曳していたからであった。

正治二年と言えば、すでに頼朝が死んだあとで、名目上は頼家が將軍位に就いたが、あくまでもロボットで実権は未亡人の政子及び北条一族が握っていた。

將軍頼家は日ごとに狂燥状態を深くし、やがて比企氏と組んで北条家追討の挙に出ようとする。政子はおのれの血を分けた愛児でありながら、ついに修善寺で彼を殺す破目に至る。

黒衣を剥ぎ取って焼いた、というだけの一見微小な事件の如くだが、そこに將軍頼家が置かれた窮状が看取できる。母及びそれに連らるる北条一族への憎しみが、母が信仰する専修念仏までも呪おうとするのである。裏

返して考察すれば、この小事件は政子及び北条一族と法然念仏教団とのつながりを暗示している。

法然が北条政子に与えた「念仏用心御尋ね」の返状を造作だと疑ぐる人もいるが、筆者は大仏復元時における頼朝と法然の關係や頼家の狂燥的な断崖なぞからまさしく事実であったと断じたいのである。

さらにこの關係の重要度は、後年に發生する後鳥羽院女房との密通事件において、いよいよ増量してくるはずである。だが、それはさらに先の章でくわしく触れた

い。

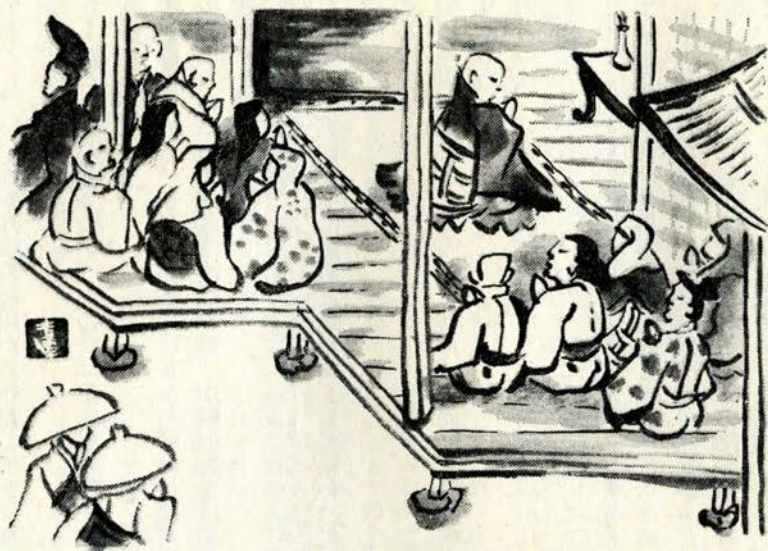
再び文治五年八月一日、東山大谷の中ノ房へ戻る。法蓮房信空をともなつて法然が九条邸から帰ったのは、もう夏の太陽が西山の彼方に沈みきつた刻限であった。

「関白どのはどのようなことをお訊きになられましたか」

待ち兼ねていた安樂房が声をはずませる。若者にとつては、まさしく今日こそは歴史的瞬間、という実感がある。

「いろいろとご法談をかさねてきた」

<日課念仏>



法然はあっさりと受け流した。

兼実の日記「玉葉」ではこの日に、

今日法然房之聖人ヲ謂フテ、法文語及ビ往生業ヲ
談ズ

とある。

その内容をさらにくわしくと迫る安樂房に法然はやさしい眼をかせした。

「お日課の刻限だ。俊乗房どのも来ておられる。さあこれからみんなで……」

称名念仏を、と自ら西の窓辺に向って坐るのであった。

法然にとつては関白兼実に初めて招かれた感動なぞ余りないらしい。一介の女房づれに法を説いてきたのと同じことだった。だいじなのは朝夕、欠かさずにつとめる称名念仏である。

日課を終えたあと、内弟子もまじえて夕食になった。主食は芋粥だが、珍らしい副食が膳を飾った。

伏菟（ふと）や蒸飽（むしあわび）、鯛の楚割（すわやり）

などであった。いずれも月輪の御殿から拝領してきた珍品である。

「わたしはこれしか食さぬが、みんなは遠慮なく飽や鯛に箸をつけるがよい」

と法然はすすめる。彼自身が箸ではさみあげたのは、餅を植物油でいためた伏菟だけだった。比叡山黒谷以来の精進食を法然は守り続けている。

禁裡で暮した安樂房にはいっこうに珍らしくない品々だったが、若い感西などは蒸飽と眼を細くして味わっている。

「ところで関白どのとは……」

安樂房の要求がようやく充たされた。法然はもの静かに語りはじめた。

「関白どの、いきなりお訊きになった。貴僧が説かれる往生業はどういうことか。わたしはこう答えた。ここにひとりの悪虐非道な盗賊がいる。悪運尽きて検非違使の手で捕らえられた。善男善女を幾人も殺めた彼には縛り首の刑を言いわたされた。その処刑の日、盗賊はふと目ざめて、いつか何処かで聞きかじった阿弥陀如来の慈悲を思い出した。処刑台へゆく道すがら盗賊は口でく

りかえした。阿弥陀さま、お助け下さい。わたしは日ごろ朝夕に七万返つつの念仏をとなえている。やがて天寿尽きて、いよいよ命終の折、最後の念仏を申し終え、息を引き取った。冥界を歩くわたしは、すぐかたわらを歩いている仲間を知った。同じように極楽浄土の光りが流れている西方へ向って歩いている。どちらが先でも後でもない。きちんと肩を並べて歩いている。わたしが信じ、説く浄土とはこういうことです」

重源以下、席にいるすべての者が何度も聞いた話だった。いつもと少しも変らぬ態度で、同じ話をしてきた法然に驚くのであった。相手は位人臣をきわめた関白兼実だったからである。

「それで関白は？」

「すると私の往生もその盗賊と同じですが、と訊いてこられた。もちろんわたしは答えた。寸分の違いもございませぬと」

この瞬間、驚天動地にも似た衝撃を胸におぼえた人物がいた。ただし芋粥や伏菟や蒸飽、鯛の楚割が並ぶこの席上ではなかった。地底にうずくまる男だったのである。

(つづく)

二 編集後記 二

○うっとうしかった梅雨時が明けると、重い雨雲の間から、太陽の熱い日差しが強く照り輝いて、もうそこには暑い夏の季節がある。炎熱の日盛りに汗を流して働きまわるつらさは、クーラーの効いた静かな部屋で仕事のできる人にも理解できるだろう。しかしこの炎熱の日中も、朝夕のひんやりした涼しい時間を用意しているし、夕立の通り雨や風鈴のかそけい音色に耳を傾け、浴衣姿に団扇を使うのも気持ちよい風情である。まして暑中休暇をとつて、海辺や山間に避暑を求めてレジャータイムを楽しむこともできれば、夏の季節の到来はやはり心待ちにしてもよいものだろう。けれど、小学生から大学生まで、夏休みはまさに待望の時である。

夏空へ雲のらくがき奔放に 風生
夕焼けて夏山おのが場に聳ゆ 竜太
○さていよいよ暑さ厳しい日々を送るにつ

けても、私たち念仏者においてはその称名の実践行におさおさ怠りがあつてはならないわけであるが、その心のありかは、たとえ、

われはたたはとけにいつかあふひくさ
ころのつまにかけぬ日そなき
という法然上人の「夏の歌」にもよく示されているところであろう。阿弥陀如来の大慈大悲の救いを信じてひたすらに精進することは、暑中ともすればたるみがちになる私たちの心を一層ひきしめて、日々なりに、精一杯の日暮しをすることを促している。照りつける夏のまばゆい光の中には、如来の無量光があふれるばかりに満ちているのである。

○本誌も会員諸氏からの暖かいご支援によって多少とも誌面の内容に充実を来してきたことを喜んでいますが、それにつけても雑誌の購読者の増加が切に望まれる次第である。皆さまの心からのご配慮を期待したい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十三巻 七月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十二年六月二十五日 印刷
昭和五十二年七月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番
振替東京八一八二一八七番
千 一〇三

《出版目録》

浄土宗出版事業協会

種 別	書 名	規 格	定価	送料
浄土選書 1	松濤弘道著 『仏教的生き方とは？』 やさしく人生の歩み方を教える理 論と実践のハンドブック	新書判 268頁	480	120
浄土選書 2	石上善応著 『仏像—その語りかけるもの』 わが心の反映としての仏像の美を 見つめる新しい思索の書	新書判 200頁	480	120
美術雑誌	『芸術浄土』② 特集 浄土宗の国宝・魂のふるさと 嵯峨野ほか	B 5 判 120頁	980	160
	『芸術浄土』③ 特集 浄土宗の国宝（鎌倉篇）・ 鎌倉をあるくほか	B 5 判 84頁	880	160
布教シリーズ	① 浄土宗の葬祭 ② 私の一日一言 ③ 法然上人のおしえ	B 6 判 16頁	1部40 300部以上38 500部以上35 送料実費	
	④ 月影の歌（岸信宏猷下著）	B 6 判 32頁	1部60 300部以上55 500部以上50 送料実費	
	『浄土伝燈輯要』全一卷 伝燈諸列祖研鑽の一大集裁として 明治初年発刊の和綴三巻本を一本 としてここに再版	A 5 判 1074頁	7000	280
	ポケット判 『浄土宗寺院名鑑』 本版を携帯用に縮少	A 6 判 364頁	1500	120
	『浄土宗教師必携』 附1977年教師手帳 資格分限ほか取得事項記入欄、主 要宗規宗綱を掲載	A 6 変型判 本草表紙 本体 120 頁 手帳 124 頁	1500 (送料共)	

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗宗務支所内

発行所 浄土宗出版事業協会

電話 (03) 436-3351 振替 (東京) 6-62587